

NEWS FID+

CONTENTS

授業レポート

「義肢装具学」理学療法学科 福本 貴彦	1
「終末期ケア論」看護医療学科 對中 百合	2
「食品加工学」健康栄養学科 米田 武志	3
「フィールドワーク演習」人間環境デザイン学科 清水 裕子	4
「理科指導法」「レクリエーション活動」現代教育学科 奥田 俊詞	5

2021年度FD活動報告	7
--------------	---

授業レポート

「義肢装具学」

理学療法学科 福本 貴彦

義肢装具学とは義肢学と装具学に大別されます。

四肢切断や欠損部位に装着する義手・義足などが義肢。四肢・体幹部にマヒなどの障害がある場合に装着するのが装具です。

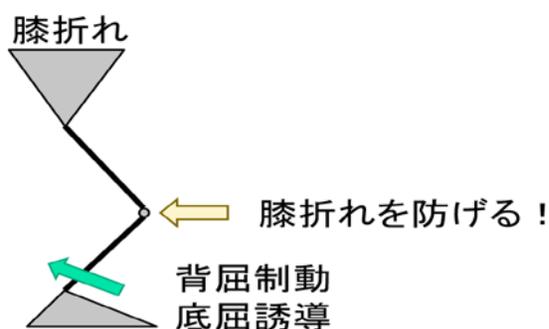
義肢装具学は3年次前期に開講され、後期では実技実習を含む義肢装具学実習を引き続き履修することになります。マヒなど様々な障害に関しては他の科目で履修済みの内容ですが、切断に関しては見るのも聞くのも初めてという学生がほとんどで、まずは切断端部に触っていいの？体重かけられるの？義足って重いの？という過去の学生からの質問に回答することから始めるようにしています。

義足で歩く難しさ…

1. 義足に体重を乗せる
 - ・痛くないの？
 - ・突然、膝が曲がったりしないの？
2. 感覚がない
 - ・地面についているの？
 - ・足はどこにあるの？
 - ・膝はどれ位曲がっているの？
3. 疲れる
 - ・義足は重たくないの？
 - ・歩くだけで疲れるんじゃないの？
4. 日常生活動作の制限
 - ・早く歩けるの？ 走れるの？
 - ・階段昇降はできるの？



膝折れを考える



3年次開講科目なので1年次からの学修内容を踏まえた専門科目であることは当然なのですが、前述の通り、全く知らない切断であったり、装具パーツの力学的知識の臨床応用が必要であったりと、基礎から応用まで、幅広く学修することが必要な科目です。

障害をイメージしにくい…義足や装具を装着した際のイメージがしにくいという対面時の過去のアンケート結果がありましたので、特に遠隔になると実際の症例をイメージしにくいと思います。義肢や装具を使用している障がい者スポーツの動画を使用して、学生にイメージしてもらうようにしました。



「終末期ケア論」

看護医療学科 対中 百合

高齢化が進み多死社会を迎えている現状から、看護師には人生の最終段階にある人々、すなわち終末期にある対象に起こる現象を知ることやそれらの原因をアセスメントすること、症状緩和や看取りの技について理解を深めることが必要になります。本科目は、3 回生前期に開講している必修科目であり、終末期ケアの概念に加えて対象の特徴やニーズを概説し、それらに対するケアについて 15 回の授業を実施しています。授業は、人の死や生について考えることや、看取りに際する倫理的な課題に対して学生自身が能動的な態度で臨めるように、原則対面で学生同士がディスカッションし、意見交換できる形態でしたが、今年度はブレンド型(対面が望ましい授業は対面そうでないものは遠隔で実施)で授業いたしました。

1)遠隔授業:オンデマンドで授業を配信

現代における死とはどのようなものであるか、死の概念や終末期の概念および終末期患者の苦痛に対するケアや、家族、遺族への悲嘆(グリーフ)ケアについては、遠隔授業としました。知識として得た内容を実践に活かせるように、事例を用いた課題を提示し、学生自身が考え、記述することで終末期をイメージ出来るようにしました。また看取りや臨終前後の動画を用いて、終末期の現状を学生が疑似体験出来るように工夫しました。

2)対面授業

遺族の方からの講演や、終末期の特徴的な技術演習、上級生とのディスカッションなどは対面授業として実施しました。

(1)遺族の語り

遺族を講師として招き、遺族としての体験を語っていただき、看護師に求めることを講義いただきました。大切な家族を失った遺族の語りから、終末期では患者だけではなく家族へのケアが必要であること、また遺族は看護師に特別な能力を求めているのではなく、日々の観察力や何気ない声掛け、気配りが重要であると気づかされました。



(2)技術演習

この演習は、臨死期に出現する症状や逝去時のケアを理解する授業として実施しています。エンゼルケアとは、逝去時に身体や頭髪をきれいに整え、故人の生前の表情や血色に近いメイクを施し、「旅立ちにむけた整え」を行うことであり、残された遺族への心のケアにつながるといわれています。演習では闘病による苦しみから解放された方の表情を柔らかくするためのマッサージや汚れを除去し血色の良いお顔になっていただくためのエンゼルメイクを実施しました。また、「COVID-19」によって逝去された対象のご遺体の扱いについてとりあげ、ご遺体と対面することができない遺族の苦悩について考えました。



(3)上級生による講義

病院インターンシップ実習で緩和ケア病棟実習を経験した6名の4回生が、緩和ケア病棟の現状や実際の看護について

講義し、3 回生とディスカッションをしました。また上級生が企画した「死のシミュレーション体験」では、大切なものを失っていくという喪失体験をすることで、終末期の患者の心理状態を考えることに繋がっていたようです。4 回生は、緩和ケア病棟で学んだ「患者に寄り添うこと」が看護師の大切な役割のひとつであることを伝えることで、自身の学びにも繋がったと考えます。

終末期は、対象者のニーズに合わせた関わりが必要となるため、対象者や家族の価値観や生き方などに合わせたケアが必要となってきます。そのためには、まず自分自身の死や生き方について考えること、また他者の人生や生き方などについても理解しようとする姿勢が必要です。今年度はブレンド型授業を実施しましたが、学生間でのディスカッションが少なかったように感じました。今後は、対面授業ではなくても、Teams 等を用いて、自分の考えを自分の言葉で表現でき、他者の意見を聞くことで他者を理解するということができるような授業を実施していきたいと考えます。



「食品加工学」

健康栄養学科 米田 武志

「食品加工学」は健康栄養学科 3 回生の選択科目です。食品開発コースの履修推奨科目になっていますが、フードスペシャリスト受験資格必修科目であるため、他のコースを含む様々な学生が履修します。

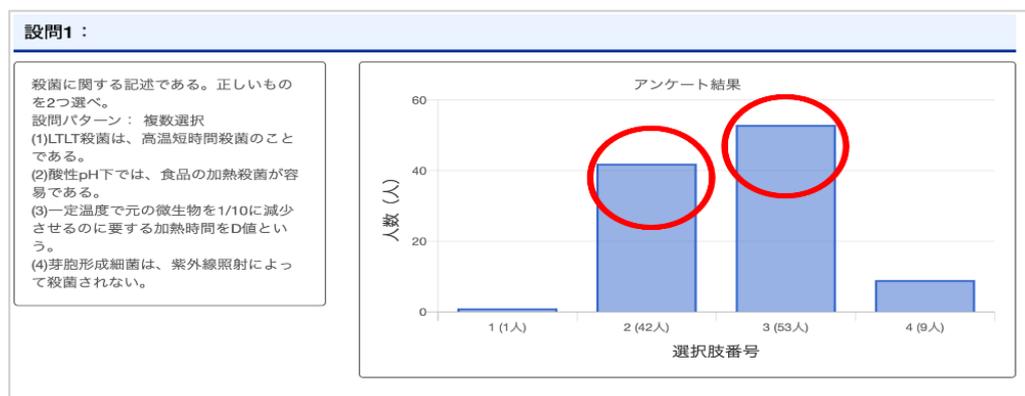
講義の到達目標としては、大きく分けて 2 つあります。1 つ目は、食品加工学分野の基礎知識を身につけ、フードスペシャリスト資格試験に十分に耐える知識水準に到達すること、2 つ目は、身に付けた基礎知識を利用し食品開発の職について商品企画を行う思考力を高め、実務に参加することができる水準に到達することです。1 つ目は単位修得のための最低限のライン、2 つ目は将来、食品開発職を目指す学生のチャレンジとしての位置づけになっています。

2021 年度前期「食品加工学」は、基本はオンデマンド型の授業を行い、定期試験のみ対面で実施しました。オンデマンド型の授業は、理解が追いつかなかった学生が、自分のペースで聞き返すことができます。また授業後も必要に応じて繰り返し再生することができるため、基礎知識の習得には適しています。但し、オンデマンドのみの運営は、従来の対面型のペーパーテストに代わる簡便な手段がないため、基礎的知識の習得の評価が困難です。この点に関して 2021 年度前期は対面で試験を実施することができたので、十分な評価を行うことができました。また前年度の経験から、自律的に視聴スケジュールを管理することが得意ではない学生が多くいることが予想できていたので、授業日を意識できるように工夫をしました。授業配置日(木曜日)の前日にオンデマンド教材を公開、木曜当日中に基礎知識を問う選択問題を CEAS アンケートで提示し、回答することで出席としました。出席率は常に 90%を超えており、通常の対面授業よりも高い水準となりました。CEAS アンケート問題は、授業を視聴すれば、ほぼ間違いない問題から、視聴後にテキストを併用して自主学習すれば回答できる問題まで難易度を広く設定して出題しました。また学生が回答した選択肢から、講義内容をどの程度理解したか把握することに努めました。その見込みをもとに次回の授業で、解説やフィードバックを行いました。なお CEAS アンケートは「回答選択率を示す棒グラフ(添付画像)」が自動で作成されるので、準備の負担が少ない便利な機能でした。

オンデマンド授業と CEAS アンケートにより、当科目の 1 つ目の目的「食品加工学分野の基礎知識の習得」は、問題なく達成できたかと思えます。そして 2 つ目の目的、「身に付けた基礎知識を利用し食品開発の職について商品企画を行うことができる」水準に達するには、手と頭を動かすトレーニングの時間が必要なので、市場の商品分析を行う又は新商品を企画するという課題を毎回設定しています。これまでの対面授業では、開発職を目指さない学生もおり、応用的な部分に時間を割く

と授業が間延びしてしまう傾向がありました。遠隔授業になってからは、視聴後、各自が自分の興味関心の強さに応じて、自分の頭で考えて課題を提出できるようになったように思います。この点は、オンデマン授業導入後に最も大きな変化(メリット)を感じました。

前期「食品加工学」は、遠隔授業導入2年目で試行錯誤しながら実施しました。うまくいったと感じる部分もありますが、これは授業の工夫だけでなく、昨年度に比べ学生が遠隔授業に慣れてきているということも関係があるかと思えます。まだコロナ禍ということで、これまでにない対応が多々あるかと思えますが、遠隔の良いところを組み入れながら、科目適正に応じて対面を組み合わせるなど、より良い学びを作っていけたらと思います。



「フィールドワーク演習」

人間環境デザイン学科 清水 裕子

本授業は、2回生を対象に、まちづくりについて実践的に学ぶ事を目的として、本年度から新たに開講した授業です。対象地域に出向き「まち歩き」を行なった上で、行政や住民などの関係者と議論を交わすなどし、地域の課題に対して、課題解決に繋がる提案を地域住民へ行きます。教材は「地域」であり、「まち歩き」を通じて、現地で地域の方々のお話を伺うことこそが貴重な教育資源となります。「地域」を題材とするために、半年以上前から、地域のまちづくり団体や行政と綿密なすり合わせを行い、授業実現に向けて調整してきました。さらに、他大学と合同で実施することが決定しており、他大学の学生と交流しながら論考することでより充実したものとなる事を期待していました。しかし、「まち歩き」はおろか他大学との交流さえも難しいことが現実味を帯びてくると、官民学で幾度も議論を重ね、授業を成立させるべく、オンラインで「まち歩き」をすることにしました。一般的な旅行サイトで見られる「オンラインまち歩き」では、カメラを持ったコーディネーターがオンタイムで移動し、現地を紹介していきますが、電波が悪い場合の対応が難しいことや数時間にわたって、安定して撮影し続ける機材を持ち合わせていないことから、あらかじめ大学教員、及び地域のまちづくり団体、行政でまちを歩き、見せたいポイントを撮影してきたものをPowerPointでまとめ、地図上に振った写真 No.と照らし合わせながら、地域のまちづくり団体の方がZoomで説明するという方法で実施しました。また、学生同士の交流を促すために、説明は5班に別れ、各班10名前後の大学混合グループを作り実施しました。

オンラインまち歩き後の授業では、オンライン上で議論を重ね発表当日に向けて詰めていきました。オンライン上での議論は、昨年度1年間を通じて習得しており、比較的スムーズに実施することができました。

最終成果の発表会は、感染状況が落ち着いていたことから対面形式で奈良公園バスターミナルのレクチャーホールで行いました。多くの住民の方々が参加していただき、皆さんのまちに対する思いを直接受け止める機会を作ることができました。

本年度、初めての試みであったオンラインまち歩きですが、学生の感想からは、「メモが取りやすく聞き取りやすかった。」

「資料を読み込みながら落ち着いて参加できた」「本当にまちを歩いているようだった」などといった前向きな意見が見られました。一方で、「説明された写真のその周辺はどうなっているのか見たかった」「空気感を感じることができなかった」「他の大学生と議論を交わすことが難しかった」など、オンラインならではの課題の克服までには至りませんでした。

実践的な学修のオンライン対応は昨年度に引き続き、試行錯誤の連続で進めています。普段より、まちづくり分野においては、行政や地域の方々のご協力が不可欠です。今回、Zoomを使った「オンラインまち歩き」の実現の影には、地域の方々の涙ぐましい努力があります。地域のために、そして学生の教育のために、多くの方々が協力してくださっていることを教育の一環として伝えていくこともまた我々教員の定めであるとあらためて実感いたしました。



写真1 教員と住民、行政職員のまち歩き



写真2 発表会参加学生

「理科指導法」「レクリエーション活動」

現代教育学科 奥田 俊詞

遠隔授業の試行錯誤に取り組んで2年目となりました。その中で授業改善のヒントに出会うことができましたので、紹介させていただきます。

1 授業形態の視点から学修形態の視点へ

感染対策による遠隔授業の実施のために、ICTをはじめとする様々な機器やシステムの存在がクローズアップされましたが、授業者としての私は、これらの教育環境を活用して何とか対面授業に近い遠隔授業を行おうと四苦八苦することになります。しかし同時に、今まで意識してこなかった多様な学修方法について検討する教材研究の場にもなりました。その中で私は、「遠隔か対面か」「講義か実習・演習か」という「授業形態」だけではなく、「学修形態」に視点を置いた授業づくりが重要であると考えようになりました。そこで、私が行った「理科指導法(分散型)」と「レクリエーション活動(ブレンド型)」をもとに、コロナ後の授業にも生かしたい取り組みについて考えたいと思います。

(1) 分散型の取り組みを個別化した学修場面の提供として生かす。(「理科指導法」の取り組みから)

「理科指導法」は、実験を行う関係で、31名、32名、34名、35名の4クラスに分けて実施しており、通常であれば8台の実験機に4人～5人で分かれることとなります。昨年度は実験動画を作成して配信していましたが、本年度は何とか実験をさせたいという思いから、クラスを二つに分けて隔週の対面授業というかたちで実施しました(写真1)。ここに来ていない半分の学生は、この授業にかかわる理論的な内容を、オンデマンドによる動画授業として受講します。授業を実施してみて、

密を避けるという目的以外に、実験授業としての質がとて高くなつたと感じています。写真1の授業は、顕微鏡観察の指導スキルを身につけることを目的としているのですが、一人一台の顕微鏡を使うという状況ができたことはとても大きなことでした。それだけなら顕微鏡の台数を増やせばよいのですが、人数が少なく私が個々に対応できるので、学生が個別のペースで取り組む個別化した学修ができたのです。

今まで、このような規模で授業を行おうとすれば、授業のコマ数が多くなるという課題があったので避けざるを得なかったのですが、今回オンデマンドという学修形態を取り入れたことで人数規模を半分にして授業の質を上げることができました。オンデマンド授業の準備という負担が増えることとなりますが、この準備は4クラスすべてに利用できるのです、実質1コマ分の負担増ということになります。私は、この負担より気持ちよく授業できるメリットの方が大きいと感じています。対面授業が可能になったとしても、「理科指導法」においてはこのシステムを活用していこうと考えています。



写真1 実験室概観

(2) ブレンド型の取り組みを適正化した学修場面の提供として生かす。(「レクリエーション活動」の取り組みから)

「レクリエーション活動」は、保育士必修/幼稚園選択の授業として設定されており、レクリエーション活動の考え方を保育に生かす力を育成します。そのために、体験的に学ぶことが重要であるのは当然なのですが、指導に生かすためには理論的な理解も必要になります。この部分の学修について、今回のオンデマンドによる学修はむしろ効果的だったと感じています。レクリエーションのルールや指導について学修する場合に動画を使用しますが、その動画はほとんど日本レクリエーション協会のHPによって提供されるものになります。動画による学修の場合、教室のモニターで一斉に視聴するよりも個々に動画を視聴する方が効果的であることと、動画がHP上にあることを考えると、オンデマンドによる授業の方が学修効率は高まると考え、この授業の半分はオンデマンドで行いました。

体験的な学修について、昨年度まではアリーナで行ってきましたが本年度は奈良県立野外活動センターでの学修を取り入れました。換気を気にせず行えることも大きな要因であったのですが、自然とかわるレクリエーション活動を行うための環境がそろっていることが魅力でした。保育において、遊びを学びにつなげる環境づくりはとても重要です。例えば、木の実や枝を使ったネイチャークラフト(写真2)や花や葉を布の上でたたいて染めるたたき染め(写真3)は、材料を準備すれば教室内でできるのですが、野外活動センターであれば自分で木や葉を集めることができます。花の咲いている環境や、木の実のなっていた木などに気づくことができます。保育で重要視されるこの気づきに出会う場面を学生に体験してほしいのです。



写真2 ネイチャークラフト (受講者作品)



写真3 たたき染め (受講者作品)

この授業実践から、学習内容によって適切な方法や場所は大きく変わるということを学びました。そして、教室内でいかに教育効果を上げるかということに固執せず、思い切って学修形態を検討してもいいのではないかと考えるようになりました。今後も、適正化した学修場面を提供できるように努力したいと思っています。

2 web カメラの小ネタ紹介

写真1のモニターに映っているのは、WEB カメラを用いた顕微鏡映像です。顕微鏡カメラは理科室にもあるのですが、動きが遅れたり専用のアプリでなければ使えなかったりするので、使いにくいと感じていました。実験の動画撮影をする中で、webカメラで顕微鏡をのぞかせてみる(写真4)と、結構(顕微鏡カメラ以上?)きれいに映し出すことができました。授業で大型モニターに映し出せば、全員に映像を用いて説明できるので便利です。なにより、どのコンピューターでも簡単に使えるので、接続やアプリ設定などの手間がかかりません。

学生が個別に観察するときには、デジタルカメラを接眼レンズにセロテープで固定して観察させました(写真5)。デジタルカメラのモニターに顕微鏡の映像が映し出されるので、グループで同じ映像を見ながら話し合うことができます。



写真4 webカメラで顕微鏡をのぞく



写真5 デジカメを接眼レンズに固定する

2021年度FD活動報告

前期

- 4月1日 新任教職員研修会
- 4月2日 OpenCEAS 説明会 (新任者対象)
- 7月24日～ 前期授業に関するアンケート実施
(全学部生を対象に「遠隔授業と併存する対面授業」について)
- 9月 前期授業に関するアンケート集計結果のフィードバック

後期

- 1月11日～ 後期授業アンケート
- 3月 後期授業アンケート集計結果のフィードバック・授業改善アンケートへの回答依頼

*2021年度も新型コロナウイルス感染症の影響により、例年実施している「研究授業」「授業検討会」「FD 研修会」については、いずれも実施を見合わせざるをえませんでした。また、前期授業アンケートについても例年どおりの内容ではなく、「遠隔授業と併存する対面授業」という視点でのアンケートを全学部生向けに実施しました。

*2022年度のFD活動につきましても不透明な部分がありますが、予定が決まり次第、随時お知らせしてまいります。2022年度も本学のFD活動に対しご理解ご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。